

■本間久次郎 嘉永6年(1853)～明治42年(1909)

通称 下駄久 静岡下駄業界発展に尽くした職人。

平屋町(現常磐町)狩野藤吉の二男として生まれ、6歳の時下駄職本間恒七の養子となる。長じて家業の下駄作りを修得し、高下駄、吾妻下駄、駒下駄など、これまでの桐白木地の下駄に漆器の塗師の手を経て漆塗りの工夫を凝らした。

さらに安倍杉材を木地に安価・量産を図り、江尻志茂町通り(現清水銀座通り)三島屋井上半蔵商店に納入、同店から地方出荷の道を開いた。

下駄は、武士にも庶民にも必需品だが、原材料も手間賃も安く売値も安い雑貨であった。本間の家には三人の職人がいたが、一束何銭という安い廃材を軒端に堆く積んで、木屑にまみれてのこぎりや鑿(のみ)でこつこつ造るので、生産量も少なく、静岡市内で作って市内で売りさばくという程度であった。

久次郎は幼いころから下駄作りにも熟練していたが、単純で工夫のない下駄作りにも疑問を持ち、いろいろ新しい趣向を試していた。

明治17年(1884)21歳のとき、安倍奥の杉板材を焼いて磨くと、落ち着いた茶褐色の艶のある色に杉の木目が浮き出して見事な仕上がりとなったことから、杉の焼下駄として商品化した。これはたちまち同業者に普及して県内外に販路を拡大した。

この成功に続き明治20年(1887)24歳のとき、高下駄、吾妻下駄、日和下駄などの大衆向けの下駄を漆塗りした高級塗下駄を開発した。塗下駄は江戸時代にも作られていたが幼稚な製品で産業というほどにはなっていない。久次郎はこれを改良して大量生産で全国に普及させたのである。

この二つの考案で、たちまち本間久次郎(通称下駄久)の名が知れ渡った。

「おれは下駄作りを誰にも教わらない。自分で考え、工夫するのだ」

「たかが下駄と馬鹿にするな。人さまが毎日履くものだ。下手に造った下駄を履いたら足が痛んで骨が曲がるぞ」と常々職人たちに戒めていた。

清水受新田(現在の清水区築地町)に創業した「清江下駄」という会社がある。

この会社を創業した井上半蔵は、江尻の三島屋という下駄屋の二代目である。三島屋は明治の初め、初代の半蔵が創業した下駄問屋で、婦人用の塗下駄を日本で初めて売り出したことで知られている。婦人用の下駄は、下駄の木地に漆で模様や絵をつける。考案者が本間久次郎で、当時引き受けてのなかったこの新製品を半ば人助けのつもりで初代が引き取り、東京に送って大当たりした。

明治26年(1893)、市内井宮にあった監獄署が駿府城内に移転した。下駄久と二代目半蔵は、この機会に囚人たちが職業を身につけるべきだと働きかけ、下駄久が刑務所の中で下駄作りを教えて一緒に仕事をする条件でようやく許可がおりる。

全国から寄せられる注文に応ずるため、27人の塗師を集め、日産2500足の下駄作りを実現した。

こうした成功を背景に、半蔵は明治45年(1912)3月、下駄製造会社を資本金五万円で設立した。工場は東海セメントに隣接した向島の一角。従業員百人を擁し、北海道産の原材料に日本楽器ピアノ部長河合小市の発明した機械を使って大量生産に乗り出し、日本全

国の履物市場を席卷した。

半蔵は久次郎の功績を讃えるため、大正4年(1915)9月には、葵区大鋸町(おおがまち)玄忠寺境内に「下駄久の碑」を建立した。

大正12年(1923)1月、清江下駄は突然休業し、ほどなく解散する。原因は、半蔵の北海道材の先物投機の失敗であった。以後、彼は経済界の第一線から姿を消し、伝説の人となった。